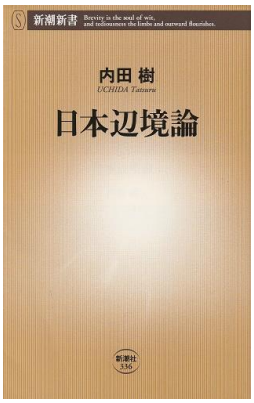
舟　は　スローライフ・持続可能社会　の　先進役　　2016 年 4 月

お 江 戸 舟 遊 び 瓦 版　425 号

水彩都市江東　　こころ美しい日本の再生　　安全・安心まちづくり

お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会　　江東区千田 13-10

内田 樹「日本辺境論」朝新潮社 09.11.20



はじめに

・　日本は辺境であり、日本人固有の思考や行動はその辺境性によって説明できるというのが本書の内容である。

I　日本人は辺境人である

・　「大きな物語」が消えた。その原因はマルクス主義の凋落が主因である。「大きな絵」が 150 年ほどにわたって、世界の見通しをよく示してくれた。人類の知性への偉大な功績と言わなければならない。残念ながら、凋落とともに、ポストモダニズムの十字砲火を浴びて、「歴史のゴミ箱」に投じられたが、その後の専門家たちのスケールの小ささは如何なものだろうか。

・　そんな中、東アジアには中国、台湾、日本を統合した「コンフューシア」（儒教圏）という共同体ができるという豪快な予言をしている、アメリカの未来学者ローレンス・トーブさんがいた。彼は、「霊性の時代」「戦士の時代」「商人の時代」「労働者の時代」と世界史を一刀両断する。

・　本書における私の主張は、「日本人にも自尊心はあるけれど、反面、ある種の文化的劣等感がつねにつきまとっている。」「本当の文化は、どこかほかのところでつくられ、自分のところのものは何となく劣っているという意識」に取り付かれていることである。

・　丸山眞男は、「日本の多少なりとも体系的な思想や教義は古来から外来思想である、けれども、それが日本に入ってくると一定の変容を受ける。きょろきょろして新しいものを外なる世界に求める態度こそはまさしく日本人のふるまいの基本パターンである」と。

・　川島武宜は「『日本人の法意識』で、「日本社会の基本原理・基本精神は、『理性から出発し、互いに独立した平等な個人』のそれではなく、『全体の中に和をもって存在し、……一体を保つところの大和』である、それは『渾然たる一如一体の和』だ。」というのである。

・　2009 年バラク・オバマはワシントンに集まった 200 万人の聴衆を前に歴史的な演説を行った。「私たちは今もまだ地上で最も栄え、最も力強い国民だ。今日から私たちはまた立ち上がり、埃を払い落とし、アメリカを再創造する仕事に取り掛からなければならない」と。たぶん多くの日本人は「どうしてこういう演説を日本の総理はできないのだろうか」と少し気落ちしたことと思う。

・　第二次世界大戦の死者たちについてさえ、その死の意味について国民的合意を持っていない。死者はある人々から見れば「護国の英霊」であり、「戦争犯罪の加担者」である。大和の沖縄出動に動員された青年士官たちは、戦略的に無意味な死に向かっていることに苦しみ、論争した。日本人は、他国との比較を通じてしか自国のめざす国家像を描けない。国家戦略を語れない。そのような主題について考えようとすると自動的に思考停止に陥ってしまう。これが日本人の国民性だ。

・　小泉内閣時代に推進された「構造改革・規制緩和」は、アメリカの企業が日本市場で自由に活動でき、利潤を吸い上げられるシステムを整備することだった。日本の国益を担保すると考えた。イラク戦争の「人的貢献」もそうだ（現在の TPP も）。日本政府はブッシュの破滅的な戦争行動を最後まで支援しぬいた。それが「親身」なふるまいとしてアメリカによって解釈されると信じた。

・　おのれの思想と行動の一貫性よりも、場の親密性を優先させる態度、「長いものに巻かれ」てみせ、それを恭順と親しみのメッセージとして差し出す態度、丸山眞男の「超国家主義の真理」だ。日本の軍人たちは首尾一貫した政治イデオロギーではなく、「究極的価値たる天皇への相対的な近接の意識」に基づいてすべてを成準していたというのが丸山の解釈だ。

・　私たちは重大な決定でさえその採否を空気に委ねる。戦艦ヤマトの沖縄出撃が軍略上無意味であ

ることは、決定を下した当の軍人でさえ熟知していた。「議論の対象にならぬ空気の決定」と。
敗戦後、私が開戦方針を主導したと名乗る指導者はなく、国体についても誰も実態は知らなかった。

- 「辺境」は「中華」の対概念だ。日本は大陸の律令制度を導入しながら、科挙と宦官については導入しなかった。九条も自衛隊もアメリカが日本に押し付けた。九条は日本を軍事的に無害化するために、自衛隊は日本を軍事的に有効利用するために、アメリカの国益に適うものだ。九条と自衛隊はアメリカの国策上、無矛盾だ。「非核三原則」は、「アメリカにいいように騙されている馬鹿な国」のふりをすることで、アメリカの核兵器持ち込みの間の「矛盾」を糊塗した。
- 私たちは国際社会のために何ができるのか。明治維新以来、日本人はたぶん一度も真剣に自分に向けたことのない問いだ。ヨーロッパ思想史が教えてくれるのは、社会の根源的な変革が必要とされるとき、最初に登場するのはまだ誰も実現したことのないようなタイプの理想社会をいまここで実現しようとする強靭な意思を持った人々である。

Ⅱ　辺境人の「学び」は効率がいい

- 場の空気に流され、辺境の狡知だけを達者に駆使する日本人の国民性格を私は他国に比べて例外的に劣悪なものだとは思わない。「日本とは何なのか、日本人とは何者なのか」を知ることは「見果てぬ夢」なのだ。明治初年の日本ほど小さな国はなかったであろう。産業と言えば農業しかなく、人材と言えば300年の読書階級であった旧士族しかなかった。この小さな、世界の片田舎の国がヨーロッパ文明と血みどろの対決をしたのが、日露戦争である。
- 「アメリカとは何か」という根本的な問いにアメリカ市民は、自らの責任で答えることを当然と思っている。市民一人ひとりが答える義務と権利がともにあることを国民的合意になっている。
- 自分の存在の起源について人間は語ることができない。空間がどこから始まり、終わるのか、時間がどこで始まり、終わるのか。私たちはすでにルールが決められ、すでにゲームの始まっている競技場に、後から、プレイヤーとして加わり、ゲームをする中でルールを学ぶしかない。
- 大学のシラバスは、欧米的な教育思想の産物で、学び始める前に、これから学ぶことの意味や有用性について書かれるが、私は「このような考え方に立ったらもう学びは成立しない」と思う。
- 師弟関係を起動するには、弟子から見て無意味と思える仕事をさせる。それが一番効率的なのだ。便所掃除は修業なのだ。私たち日本人は学ぶことについて世界で最も効率のいい装置を開発した。

Ⅲ.「機」の思想

- 日本では宗派間の対立で殺し合いを演じたという事例はほとんどなく、緩やかに共生している。困難な問題立ち向かうと、宗教者たちは様々な概念を駆使して対処する。「機」と言う概念もその一つである。剣立会いの場では、自分を勘定に入れないで動けと。私の敵は私である。私に仇をなすのは私である。私を滅ぼすのは私である。どの伝書にもそう書いてある。「機」の思想で私たちは「飛び込む」ことが可能になった。冒険的な決断をすることができるようになった。
- また、日本人はどんな技術でも「道」にしてしまうと言われる。辺境人は外部から到来するものに対して本態的に開放性である。

Ⅳ. 辺境人は日本語とともに

- 日本の辺境性を形づくっているものは日本語と言う言語そのものである。その特殊性は、表意文字と表音文字を併用する言語にある。帝国主義列強の植民地支配に屈していたアジア、アフリカの諸国とどう違うのか。明治初期に日本は英語、仏語、独語で書かれた大量の文献を翻訳した。
- かつて岸田秀は日本の近代化を「内的自己」と「外的自己」への人格分裂で説明した。世界基準に合わせようと従属的・模倣的な「外向きの自己」から「洋夷」を見下し、我が国の世界に冠絶する卓越性を顕彰しようとする傲慢な「内向きの自己」へと集団的に狂ったと岸田秀は診断する。

おわりに　九条と自衛隊の矛盾をめぐり、改憲派と護憲派が半世紀にわたってドメスティクな議論をし、政府はアメリカの軍事的同盟国として出兵させられる機会を先送りできた。

所感：　市民一人ひとりに考える義務と権利のあるアメリカ人に対し、義務と権利意識が薄い何とも不思議な日本人は何なのか。この激動の世界でどう生きられるのか課題は大きい。　（文責　中瀬）